2016.9.15

ロータリーの差別化を考える

2016-17 年度第 2790 地区
地区研修委員会委員長
白鳥　政孝

あらゆる団体は、成長・発展を続けるために、また維持していくために会員の増強や維持に苦心している。ロータリーとて例外ではない。２７９０地区では年間におおよそ２５０人が入会しても、ほぼ同数が退会して会員数は横ばいである。しかもクラブの平均年齢は徐々に高齢化している。

これは、政治・経済の都市への一極集中化と地方経済の疲弊化に少子高齢化が相まっている日本の社会情勢によることが多い。今後この傾向は避けられない状況にある。しからば、ロータリーは手をこまねいているだけでよいのだろうか。先人の築き上げたロータリーを存続させなければならないと強く思う昨今である。

日本のロータリーでは入会１年未満の会員のうち 53%の人が退会しているというショッキングなデータがあった。ロータリーについて何も知らずに辞めていくとは、なんとも残念なことである。地域社会の大きな損失だ。ここに、これからのロータリーのあり方が問われているのではないだろうか。つまり、数を追いかけるより質の向上を図ることが先決になる。ロータリアンの質を上げることにより量は維持・発展が可能となるのだ。

ロータリアンは企業の経営者か専門職に携わっている人が多い。そして、自己の企業や専門職の特徴を発揮して事業を営んでいる。つまり他者との違い（良い点、優れている点）を明確にして信用を得て事業を行い社会の役に立っている。経営方針、社是、社訓などにそれが見られる。いわゆる自己の企業や専門職が他との違いがあることを前面に出し、それを学び、身に付けて継続的に繁栄している。ロータリーに置き換えて言うとロータリーは他の団体と差別化して特徴をだしていかなければならない。この差別化が世の中で認められ、信頼されて経営や専門職が成り立っているのです。この差別化こそがロータリーの魅力なのです。

それでは現況のロータリークラブの活動を見ると、他の団体との差別化については極めて鈍くなっている。ロータリーが他との違いとは何であるか。１１１年前に創立されたロータリーは紆余屈折を経ながらも築き上げた思想がある。その思想を基に二つのテーマを掲げて、四つのテストで自問自答し、ロータリーの目的を実際に行いながら、自己の人間性をも高めあい精進している。その行動が家庭に、職場に、地域社会に良い影響を与えて、世のため人のためになっている。という伝統的な仕組みができている。

近頃、この他と違う際立った差別を意識しないでロータリークラブは社会奉仕活動や国際奉仕活動にいそしんでいるとしか云いようがない。ロータリーがあるべき姿勢や思想を語らずして、ロータリーの哲学はほとんど顧みられていない。これでは他との差別化どころか、他に同化してしまい、なんら特徴のない団体となっている。ロータリーの魅力を再現しない限リ、新しい会員を迎い入れることはできない。つまりロータリーの思想・哲学に磨きをかけ（話しあい）て、質を上げていかなければならない。ロータリーの理念、目的、テーマ、四つのテスト、行動規範に注目し、どうしてロータリーにこのような思想が生まれたかの背景をお互いに語り合うのが肝心である。刹那的な親睦活動にうつつを抜かしていてはロータリーの将来はない。

重要なのは、ロータリーが単なる楽しい親睦目的の社交クラブやどこにでもある慈善団体ではないと銘記することだ。

ロータリーとは、人生の生き方そのものであり、心のありようであり、また精神の姿勢でもあるのだ。

第一にロータリーの思想は相和すうちに切磋琢磨する親睦はあれども、刹那的な親睦活動はロータリーの哲学にはない。だから真の親睦でない活動は外ですればよい。ロータリーは思想をもち、人間を大事にする団体、人の尊厳を大事にする団体、人間の関係を大事にする団体である。さらに世のため、人のためになる心を養う団体であり、世のために尽くす団体である。またお互い切磋琢磨する団体でもある。これがロータリーの魅力であり、他との際立った差別化である。これを失っては歌を忘れたカナリアはもうカナリアではないと同様にロータリーの差別化を意識できなくなってはもうロータリーではないのだ。

世界のロータリーは会員資格の範囲を緩め、門戸を開放して広く人材を求めてロータリーの存続を図ることにした。さらに７年前、従来の奉仕、親睦の価値観に加えて、高潔性、多様性、リーダーシップの価値観をロータリアンに要請してロータリアンの人間性向上に大きく役立つようにしている。遅まきながらロータリーの思想の本質を身に付けるために、これら三つの価値観を新たにつけ加えている。

この中核的価値観をいつも念頭におくことは、四つのテストと同様にロータリアンの重要な指針としなければならない。決しておろそかにできない。

ロータリーの本質を探るのに歴史から学ぶことは実に多い。しかし、事実だけを知ればよいというものでない。１９０５年にロータリーが誕生したという事実を知るだけでなく、その当時の背景を知り、その後の影響を考えることによってより深くロータリーを理解できるのだ。決議２３－３４、それに続く４大奉仕の概念の出現、四つのテスト、DLP、CLP などについてその事実を知るだけでなく、その前後の流れを考えれば、ローリーの理解は深まり、ロータリーの本質を究めていくようになり、ロータリーの魅力を知り、ロータリーの心を理解するようになる。

近頃、ロータリーの定款をロータリーの憲法と言う人がいる。何故だろうと思う。これはロータリーの歴史から得た教訓であってクラブの運営に教訓から得た手続きを踏まないといろいろと問題が起こるので、クラブの定めとして列記したもので、そこに、ロータリーの目的や理念を載せているから憲法と混同しやすくなっている。そもそも憲法とは、そう簡単に変えたり付け加えることはできないのだ。

歴史にしてもクラブ定款にしても、本来の意味を知ることが、ロータリーの本質を理解するのに役に立つのだから、じっくり考え、話し合ってみるべきだ。親睦とはこのような話し合いから生まれるものだ。

ロータリアンは一国一城の主だから縦社会のリーダーシップ慣れて長い経験から先入観を持っているので人のいうことに耳を傾けてくれないロータリアンが多い。ロータリー情報がロータリアンに浸透しない大きな原因になっている。先入観のない子供に教えるのとは訳が違う。

一国一城の主に向かってロータリーとは赫々云々（かくかくしかじか）と論ずるのは難しい。ロータリーには「超我の奉仕」があり、「ロータリーの目的」がり、「四つのテスト」がある。各テーマの根底にはロータリアンの関係は皆横社会であることをロータリアンは強く意識しなければならない。お互いの関係は対等（イーブン）である。平等とも言っているが、対等とは大きな違いがある。対等の付き合いというが、平等の付き合いとは言わない。男女平等とは言うが、男女対等とは言わない。法の下に平等というが、法の下に対等とは言わない。対等とは１対１の両者の関係に優劣や上下関係のない間柄をいう。これもロータリーの大きな魅力である。対等のロータリアン同士の関係が横社会のリーダーシップを学ぶことになる。こんな団体はない。

ロータリーは地位、名誉、経歴、会員歴、年齢、経営規模による優劣や上下関係は全くなく、すべての行動の関係は対等であるという思想がある。この対等である思想がロータリー１１１年の歴史を作っている。

対等であるからと言って勘違いして基本的な道徳心を失ってはならない。長幼の序ありとか、人を敬うとかの基本的な道徳を失ってはならない。

ロータリーでいうリーダーシップとは、自己抑制と忍耐、多様性（違いの容認）、高潔性（品格の向上）、指導性などのことを言う。このリーダーシップを身に付ける機会がロータリーには多くある。つまり自己研鑽を積む場を与えている。ロータリーを真摯に活動すればするほど人間的成長に磨きがかかるのだ。

もしも、ロータリークラブ内に対等な関係がなく、俗に言う親分子分関係が横行していては、自由闊達な意見は妨げられてしまい、クラブ内でのお互いの切磋琢磨は望めない。刹那的な娯楽を求める親睦の傾向が強まるだけだ。

それでは、この対等な関係をクラブ内で維持発展させるにはどうしたらよいか。

ロータリーのテーマである「超我の奉仕」“Service above self”を思い出そう。「自分のことより、まず人のためになることを考えて行動しなさい」といっている。これは人間の本能とは全く相反するものだから本能を抑える訓練をしなければならない。ロータリーではその訓練を積むために役わりを一年交代としている。いろいろ役わりを担って経験させているのだ。

このように訓練する雰囲気がクラブ内に充満すれば、向上心がみなぎり、前年踏襲はなくなり、クラブはレベルアップする。そして会員同士の向上心と会員相互の切磋琢磨が相乗効果を発揮してくる。そこには、お互いの考え方や趣味に感化したり感化されたりして交友関係が一段と深まり、お互いの人生を豊かにする。その豊かさと人間形成がロータリーの魅力となって家庭に職場に地域社会にゆっくりと放出されて、より良い社会を作っていくことができる。さらに事業経営、専門職に携わるロータリアンにも良い影響をおよぼしてくる。

このロータリーの内面的活動がロータリーの公共メージアップにつながり、会員増強に役立つのだ。こうすることはロータリアンの理想であるかも知れないが、一歩でも理想に近づけるのが私たちロータリアンの使命ではないだろうか。対等な関係を保ち、謙虚さを失わず、向上心がある限り、ロータリーはその人の人生を豊かにしていく。ロータリーから思想を学んで豊かな人生を自分のものにしていこうではないか。

「山路（やまみち）を登りながら、こう考えた。」という一文に始まり、「智（ち）に働けば角（かど）が立つ。情に掉（さお）させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」

草枕の冒頭の言葉だが、ロータリーでは智に立つのはご法度（はっと）だ。侃侃諤諤（カンカンガクガク）と議論が白熱するのはいいが、喧々諤々（ケンケンガクガク）の状態に転じて、抜き差しならぬ対立を起こすことは往々にして起こる。ロータリーは職業奉仕で学ぶ「打算の世界」でなく「愛情の世界」であるべきだ。常に相手の身になるように考えることだ。

私は情に棹をさして流された方が良いと思う。そこに工夫が生まれて友情や知恵がたくさん生まれると、私は信じている。

ロータリアン皆さまのご健闘を祈ります。